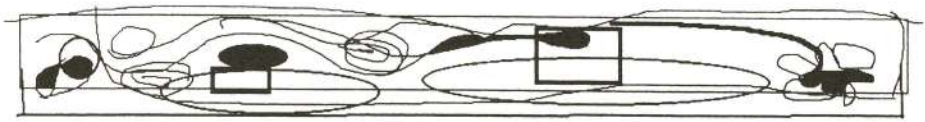
村野次郎創刊

香蘭

2023年(令和5年)10月号

第 100 巻　　第 10 号　　通巻 1114 号

二〇二三年(令和五年)十月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第一〇〇巻第十号



香　　蘭

2023年（令和５年）10月号
第100巻　第10号　通巻1114号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（98）……小林　ますみ…表二
近詠十五首　谷戸の春秋……小原　裕光…2
作品
一……4
二……22
三……30
推薦香蘭集……38
香蘭集……39
作品一　十首選（八月号）渡辺礼比子選……16
作品二・三　十首選（八月号）千々和久幸選……18
一頁公論（29）香山選者への感謝　あれこれ……阿部　容子…15
村野次郎への旅（162）……千々和　久幸…20
羊屋の回覧板（4）魂に種を蒔きたる野郎ども……河野　慎二…28
エッセイ・自由研究　御霊鎮めの物語……中井　房江…44
焦点（八月号）伴侶を詠う……牧野　道子…46
七首抄（八月号）……宮原・脇谷・徳渕・坂井…48
河野慎二「五色の春」評（八月号近詠十五首）……満木　好美…49
作品評（八月号）
作品一……高畠　憲子…50
作品二……土井　紘二郎…52
作品三……安田　恵子…54
香蘭集……能城　春美…56
緑地帯……中村（美）・三神・原（礼）…58
耳言あれこれ（23）……田中　あさひ…61
明宝研究会第一四二回　七月例会
大森静佳歌集『カミーユ』を読む……中村　陽子…62
他誌拝見129……川久保　百子…70
歌会及び会合・会員消息・他……72
編集後記・新宿日記……76・表三
表紙絵……中村　陽子「春ひかる」　目次・緑地帯カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（98）

街の音玻璃戸に近し寝て聞けば
人ら連れだちたのしむらしき

『樗風集』

小林　ますみ

『樗風集』の昭和十年、「胃腸病院入院」と題する七首中の作品の一首です。

この短歌を読んだ時、私が入院していた二十年以上前のことを鮮明に思い出しました。

入院している時には、病室のベッドの上だけが生活の場です。狭い部屋の中にいると、ついついガラス窓から外を見たり、外を歩いている人たちを見たりしてしまいます。入院するまでは、仕事等で忙しく過ごしていた毎日から、何もすることがなく、また、できない毎日だったのでしょう。

昭和十年と現在とでは、病室の様子なども随分異なり、昔は外からの話し声や物音もガラス戸越しに聞こえていた事でしょう。でも村野先生は、その人たちの話しているのを聞いても、「人ら連れだちたのしむらしき」と下句に書かれているように、何とやさしいお人柄なのだろうと思いました。

（短歌新聞社文庫『樗風集』17頁に掲載。『村野次郎三百首』には収録されていない）

四選者の作品

鰻念仏

平塚　千々和　久幸

久し振りに鰻食うかと「ヒサシブリ」に力を込めて暖簾をくぐる
鰻屋は少し離れて二軒あるどちらの酒が美味いかは知る
まず酒をひと口嘗めておもむろに鰻を箸につまみあげたり
鰻うなぎ其が生まれなど知らでよし今宵はオレの臓腑で踊れ
ゲップなどしてる場合か勘定はまだかそれじゃあオレは帰るぜ
鰻より寝床が先だぶっ倒れ叫びしものかおーい石麻呂
鰻めが夢に現れ言うことにゃ下手な念仏じゃ往生出来ぬ
妻よオレは鰻に食われてしまったよ　安い鰻を食べたんじゃない

ここに居る

鎌倉　高畠　憲子

〈上きげん〉と書かれし酒を荷車に運ぶ人あり汗をかきつつ
茄子紺の色に漬かりし茄子ひとつ糠を洗へば一献の友
ケータイに出れば「居たか」と言ふ父よわたしはいつもここに居るのに
暗誦をするからと父の「小諸なる古城のほとり…」が今日も始まる
受話器より聞こえる父の暗誦は「浅間も見えず…」あたりでよどむ
先生の入院されし六月なり一年後にわれ夏風邪に臥す
風邪をひく暇ができたね、お前さん　わが肩をわれがぽんと叩けり
紫陽花を見るいとまなき私を紫陽花が見る歯科の窓より

夏の少年

我孫子　丸山　三枝子

尾瀬ヶ原の旅の動画のとどきたり主役は夏の少年太一
草原を風わたりゆく　一枚の野はめくれると民子詠みにき
いつの日のどこのロッカー忘れ物を捜しいるなり人を待たせて
たいくつな鯉も混じるか夏日さす池にかさなり泳ぎいるなり
空間という空間を揺るがせて鳴きしきるなりミンミンゼミは
Horizonは最新式の骨密度測定装置にて横たわれと言う
さかさまに採血管に溜まりゆく赤銅色の血を見つめいる
この夏を廻りつづけし扇風機を拭いておりぬ飛べないわたし

ころしてしまへ

東京　桜井　京子

はつ夏の風をとほして歌ひたい嵌め殺しのまど透きとほらせて
踏むならば踏んでおゆきよ山桃のあまた落ちたるその上とほる
駐車場に蛇が出るとふ貼り紙にころしてしまへとわれは思ひぬ
ひとりでも寂しくはない夏の風　猫はどこかへ消えてしまつて
球場を愛してしまつた蔦の葉が登りてやまず夏の陽照りに
女とは狡くて淫らで嘘つきで…鬼平言へり陰口ぞよき
眠らぬひと眠れぬひとも聴いてゐむ〝FM江戸川〟　風少しあり
右肩がどうにも上がらぬやうになり連れ合ひは首がまはらぬと言ふ

作品一　十首選

（八月号作品から）

渡　辺　礼比子　選

・リハビリのために亡き妻が使いたるボールを壁に放りて遊ぶ

千々和久幸

リハビリ用器具として開発された大きなゴムボールをバランスボールといい、体に故障のある患者の治療には効果を発揮しているようだ。しかし、これを使ってインストラクターの指示通りに動くのは、患者にとっては、なかなかの苦業である。当時、作者は心の中で応援しながら、妻の励む姿を見守っていた。そんな場面を思い出しつつ、遺品となったボールをなんとなく壁にぶつけて憂さ晴らしをしている。さりげなく歌われているが、亡き妻の死に対する無念の思いの籠った、切ない挽歌と読んだ。

・かそかなる気配のありて芍薬のしろたえの花くずれ落ちたり

朝香ふさ枝

芍薬の花の崩壊の瞬間を捉えた感覚の鋭さに驚く。花がくずれ落ちる直前にかすかな気配があり、それを感じ取ったという。対象を見る目に緊張感がなければ、こういう瞬間に出会うことはできなかったに違いない。それは花の美しさを愛でていた作者に訪れた最高のシャッターチャンスであった。音なき音がまことに調べよく詠まれている。

・南極ではごちそうと聞く生キャベツ今日の夕餉にたつぷり刻む

相川　公子

年に一度しか食料が補給されない南極観測隊の人々にとって、生野菜は貴重な食糧品である。日本で「生キャベツ」といえば、トンカツなど肉料理の添え物か、簡単なサラダくらいしか思いつかないが、極地では、生であることに言い知れぬ価値があるのだろう。生キャベツのありがたさを再認識し、「たっぷり刻む」としたところに作者の食べ物に対する謙虚な感謝の思いがこめられている。

・僕たちはどこで間違へたのだらう青空のやうなネモフィラそよぐ

石井　雅子

作者は若い男性だと聞かされたとしても、なるほどと信じたくなるような一首。私達は自らの現実に縛られがちだが、創作の中ではいかなる主語を使うのも自由である、この場合「僕」を用いることで歌に軽みがでた。上句は迷える恋人のつぶやきのようでもあり、また深刻な世界情勢を憂いているセリフのようにも読める。どう読むかは読者に任されており、この自在さが一首の魅力である。

・よく晴れた五月の空を見ていたらこらえきれずに泣いてしまえり

江口　絹代

晴れ渡った空を見て何とも言いようのない寂しさや悲しみを感じることは、誰にでもあることかもしれない。それは少しオーバーにいえば、生きとし生けるものの根源的な悲しみに触れるということである。しかしこの作品では「泣きたくなった」ではなく、こらえ

きれずに泣いてしまったのだという。その詠嘆はとりもなおさず作者が心の中に抱えている悲しみの質が、漠然としたものでなく、もっと生々しい体験からきているからであろう。飾り気のない歌い方だが、一直線に歌われているだけ強く読者の胸に突き刺さる。

・二人子の通ひしもみぢ幼稚園運動会にわれも駈けたり

土井紘二郎

たまたま子供たちの通っていた幼稚園の前をとおりかかった時、幼子のパパであった時代、運動会の保護者向けの競技で子らのために全力疾走した記憶がよみがえったのだろう。当時の自らの若さをかけがえのないものとして振り返り、胸を熱くしている作者である。「もみぢ幼稚園」という、一時代前のなつかしい匂いのする固有名詞が効いている。

・部屋にこもりストレッチする夫みれば機織をする鶴のようなり

長野　道子

初老の「夫」のストレッチから健気に機を織る「つう」の姿を連想するとはなんと奇抜な発想であろう。「鶴の恩返し」での男女の立場が逆になって、こっそり襖をあけて覗き見をしている作者の姿が想像されるのも楽しい。作者のいたずら心はもちろん相手には内緒であるはず。この作者の詠む夫の歌はいつも実に味わいのある夫恋（つまこい）の歌である。

・日輪のお尻の当たりのポケットが落としたらしい五月の金星

中村かよ子

太陽にお尻があって、彼（または彼女）の履いているズボンにはポケットがあるなどいったい誰が思いつくだろう。太陽との関係でいえば、この金星は五月の陽が沈んだあとの宵の明星であろう。初夏の明るい太陽が夕光を撒き散らして沈んでいった後にぽっと浮かんでいた金星と作者は出会ったのだ。「らしい」の用法も巧みである。「ごとき」や「ような」のような直喩ではなく、もう少し確信にちかい表現である。詩人にも童話作家にもなれる作者だなあと改めて思った。

・「馬車」と呼ぶ台車に夫はわれを積み畑へ苺を摘みに出かける

室橋　玲子

夫の押す台車に乗せられて畑に行く。これを馬車と考えれば作者はお姫様。羨ましいなあ、とても幸せだなあと思う。しかも摘みにいくのが「苺」というからさらにファンタスティック。どんな状況になっても、人はユーモア精神さえ忘れなければ、いくらでも人生を豊かにすることができるとこの歌から学んだ。ひとついえば、三句の「積み」と五句の「摘み」の音が同じ「つみ」である点が惜しまれる。

・なんべんもお猪口になる傘ひょいと戻し風の道ゆく雅子さんなり

丸山三枝子

最近の傘は軽量なだけに風がふくといわゆるお猪口の状態になりやすい。だが、「雅子さん」は嘆くでもなく、愚痴るでもなくそのたびに、何もなかったように傘を元にもどして、さっさと作者の傍らを歩いてゆく。小さいことにいちいちこだわらない、「雅子さん」のキャラクターが魅力的である。そのさばさばした態度を惚れ惚れと眺めている作者の姿も見える。「ひょいと」という副詞の効いた確かな描写でありながら、喩を孕む歌とも読める。

作品二、三　十首選

（八月号作品から）

千々和　久幸　選

・あちこちにトランクルーム建てられて過去を捨て難き人の多しよ

小原　裕光

お行儀のいい歌というか、性格を思わせる端正な歌である。トランクルームは昨今よく見かける光景だが、作者はそれを一光景としてやり過ごすのではなく、それにひと理屈を加えたもの。

ただこの下句の見方は模範答案で、優等生になった。その分作者の体臭が稀薄になった。そこに食い足りなさが残る。下句そのもは独立したフレーズとして次の出番もあろう。

・朝なさな鴉一羽がゴミ漁るひとり生きるはつらくあらんか

庄司　健造

鴉にこと寄せて自らの人生への感懐を開陳した歌。そう言われてしまうと人間所詮は一人一人の人生だから、否応はない。この場合、「つらくあらんか」は疑問ではなく肯定に立った詠嘆であろう。

「朝なさな鴉一羽が」という描写は事実だろうが、「一羽」は出来すぎの感なきにしもあらず。日常身辺の歌にも心境の深まりが見えて、今後の歌にひと味が加わろう。

・花を膝にあつと思ひ出す一大事明日のパンを買ひ忘れたり

髙田みちゑ

生きる糧をすっ飛ばして明日を迎えるのは人生の一大事だ。物忘れには同情を禁じ得ないが、すっ飛ばしてもよかったのは初句だろう。いやいや花より団子だから、などと強弁してはイケない。

一、二句は腰が浮いて推敲の余地を残したが、自己戯画的な歌い口に親しみが持てる。作者の大らかな性格が生んだ一首。

・幸福にしかなれない所で幸福はひとをさがしてゐるのだといふ

田中あさひ

幸福屋は最初から不幸は売らないのだから、幸福の側から見ればきっとこうなる。それをへ理窟に仕立てあげたところが面白い。だから不幸な人は黙ってこの歌を通り過ぎるしかあるまい。

実は幸福に捉まると、人間は退屈して逃げ出したくなるもので、それは不幸でもあるかも知れぬ。どのみち幸・不幸はコインの裏表、従って万事にほどほどというのがもっとも無難。はてさてこのへ理屈、幸福屋が許すかどうか。

・連休ののどかな部屋の昼下がり昭和の風が訪ねて来たり

中村　陽子

上句、さて何が始まるかと下世話な好奇心で先を読み急げば、何と「昭和の風」と来た。悪くはないがいや興味津々だが、いかんせん「昭和の風」が大き過ぎた。これではせっかく掬った笊から実がこぼれよう。昭和を吹く風は人それぞれだからさ。

作者にとって昭和がどんな風だったかが聞きたかった。業界用語で言えば「神は細部に宿る」ということになろう。

・荒波にもまれ浜辺の丸き石気づけば泣けぬ女になりて

安田　恵子

下句の「気づけば泣けぬ女になりて」だけを取り出せば少し臭い

が、上三句が真っ直ぐ正面を見ているから、むしろ思弁的な歌に仕上がった。とは言え、この断定の向こう側にわずかな心揺らぎの見えるところが読みどころ。得たものと失ったものの間をしばらくは行き戻りすることになろう。

「丸き石」になったことは賞讃さるべきことだろうが、そのために生得の感受性まで削ぐことになったので角を矯めて牛を殺す、の類い。

人生、良いも悪いもない、わが決めた道を行くだけだ。

・あてどなく歩く街角予期もせぬ人と遭えるか春の夕暮れ　小城　勝相

タイパ、コスパ等という効率、成果優先の時代。「あてどなく歩く」は人間回復の特効薬と言っていい。作者はスケジュールに管理されない、こんな気ままな散策を楽しんでいる。時あたかも春愁の頃、願わくば予期せぬ人との出逢いがあれば最上の舞台となるのだが、あたりを見回せば犬を連れた人か、ランニングをする中年ばかり。かくなる上は自らが歌人になって、予期せぬ憧れの人を探し読者を口惜しがらせるしかあるまい。

ちなみに「遭う」は（好ましくないものと）思いがけなく出くわす場合をいう。ここは「遇う」だろうが、校正ミスか。

・中村屋の鮮魚売場をわたくしの冷蔵庫として日々に通いき　大河原良子

この欄ではもう古参だが、歌会にも大会にも顔を出すことがない。ただ一人、己の作歌工房で休詠することなく、営々と作歌を続けて今日がある。「香蘭」には他にもこのような仲間がいて、組織を支えてくれている。有り難い存在である。

ところでこの歌、軽く詠み流しているように見えるが、「わたくしの冷蔵庫」は中村屋を食って楽しい。

・面会の帰りに見つけしベーカリー今日は焼きたてメロンパン買う　能城　春美

母の介護に時間を割かれる作者。夜（昼？）はメロンパンですましちゃおう、母さんはあんなに頑張っているのだから、というところか。辛さを嘆いたりせず、口笛を吹いてみせるような歌だが、読みの深い読者には作者の内心が透けて見えよう。

本来が楽天的な性格で、書と二足わらじの孝行娘はきっと歌も上手くなる筈である。

・「春ばてです」と新語の診断に驚くも加齢ではないと気を取り直す　千川　陽子

「春ばてです」とは粋なことをいう医者もいたものだ。しかし作者も負けてはいない。「加齢です」と医者に言わせなかったのだから天晴れ。これを持ち出されると「万事休す」の思考停止になる。

時にはこんな軽妙な会話を楽しむことで、日々の暮らしを豊かにしたいもの。どんなに辛くとも「人生、楽しむに如くはない」のだ、つまり楽しまねば損だ、という気になる。

作者は三十年間亡夫の歌を詠まなかった、自己に峻厳な作者。近時に至りぽつぽつ亡夫への哀歌が見える。自在に詠むべし。

本欄の歌人たちよ、もっと大胆な失敗作（実験作）を！。

谷戸の春秋

小原　裕光

モクレンの銀の莟に見え隠れ大船観音のこの年の顔

どんど焼きのはじまる前の谷戸の空を飛行機雲の音なく伸びる

籠り日を出でてゆきたる椿園に太郎冠者咲き侘助もいる

百歳の母へと送る品さがす一時(いっとき)喜ぶものは何かと

落葉より顔のぞかせる蕗の薹　世の中何も変わっていない

木々の根の露わになれる森の道生きている根を踏みしめてゆく

山桑のシンメトリーの葉に惹かれ摘みてゆかなと森の道行く

木の間より薄日もれくる尾根ゆけば時おり聞こゆる山鳩の声

観音に見下ろされつつバス待てり今日一日の暮れてゆく街

咲くごとくシラカシの葉の萌え出でぬ卯月半ばの裏山の森

ブロッコリーの収穫終えて戦場のごとき畑を夕日が照らす

近詠十五首

農鳥の富士に浮かべば耕さぬ吾も浮き立つ緑地の丘に

桜貝拾わんと歩く由比ガ浜にプラスチックの欠片きらめく

駅前の小さき書店に手にしたる最終号の〈たらば通信〉

小窓より薄日さし入る古民家のガラス細工の豆雛ひかる

ひと言随想

私の原風景

鎌倉に住み四十五年になります。退職を機に、新しい事を始めたいと、市の「生涯学習ガイドブック」に短歌を見つけ、電話で申し込み、香蘭鎌倉第三支部に入れて頂きました。それまでも、詩や短歌は好きでしたが、実際に短歌を作る事は、とても難しく、昨年、選者をお辞めになられた香山静子先生には、多くの事を教えて頂きました。

北海道十勝の農家に生まれ育った、私の原風景は、地平線を見渡すような自然とサイロのある農村風景です。今も、近くの緑地や田園、山道、海岸を歩き、動植物を見て季節の変化を感じ、新しい発見を楽しんでいます。歩きながらメモし、下手な歌を作っています。香蘭創刊百周年に、在籍させて頂いている事はとても嬉しいです。大正十二年生まれの母も百歳になりました。これからも、身近な所から歌を作ってゆきたいと思います。

村野次郎への旅（162）

大正期の「香蘭」（二十三）

千々和　久　幸

「香蘭」第四巻第十一號は大正十五（1926）年十一月一日に発行された。表紙畫、題字及び裏畫は前號に引き続き北原白秋。総頁数56頁は前號、前々號と同じである。

目次から見ていけば、最初の短歌欄には村野次郎、石野正太郎、橋本政一、池上秋石、島田旭彦、本間樂寛、南部松若丸、南草萌、川村浩、冬野木枯、清原齊、橋本敏夫、深野庫之介、杉浦翠子の十八名。

次いで村野次郎のエッセイ「歌壇雑感」を挟んで、第二短歌欄には芥子澤新之助、成田憲三、山野冬樹、横山信吾、加藤直一、富永置三、河野紫行、眞島勝郎、日根まもる、西村孝、住吉良康、村上好の十二名。

南部松若丸のエッセイ「柿蔭集より觀たる島木氏の心境（一）」、続いて霜月集（短歌）に佐藤達夫など十三名、冬野木枯の歌抄歌評、前月歌壇合評（杉浦翠子、本間樂寛、深野庫之介、村野次郎）、白菊集（短歌）に十六名。本間樂寛のエッセイ「俳人一茶の面影（未完）、落葉集（短歌）に二十名。歌會記事、六號雑記（敏夫、松若丸、薫、正人、達夫、秋石、編輯後記（村野次郎）、以上であった。

巻頭に掲載されている先生の作品は「柿の熟るる頃」六首である。このペースは毎月変わらない。

柿の熟るる頃　　村野　次郎

①家内より熟れたる柿を指すなれどまだ葉を繁み取りまどひつつ

②柿の葉は日ごと散りつつ赤き實の梢あらはに見え初めにけり

③この朝の秋づきしるしとりいでゝ圍ひの梨の食すに冷たさ

④わが行きて取ればやすきを賞めにつつをさなごをして取らし喜ぶ

⑤あかあかと燈を點けはなち人待てば頭のふけのしきりに痒し

⑥氣にかかる用事つぎつぎたまれども折見て遊ぶたのしかりけり

屋敷内にある柿の木を見ての家族の遣り取りが微笑ましく詠まれている。先生ときに三十二歳、公私にわたってもっとも多忙を極めた時期であったろう。しかし忙中閑というべきか、一連の作品からは寛いだご家族の一齣が窺える。先妻輝子夫人は大正十三（1924）年に病没されているから、①の「家内」は後妻ということになる。しかしこのあたりから先生の暮らしの周辺は見え難くなる。

いったい先生の経歴はほとんど記録に残されていない。先生が沈黙されていたこともあろうが、後進も先生に密着して実生活と短歌との関わりを解明しようという態度が稀薄であった。もしこの後に先生の伝記を書くとなると、作品を辿るしかない。

わたしもズボラで先生の経歴については殆ど無頓着できた。したがってこのエッセイは個人的な趣味、嗜好による記録でしかない。今にして慚愧の思いに堪えない。余談はさておき先を急ごう。

①の歌、先生が真っ先に柿の熟れたことに気づかれたのだ。②の歌、先生苦心のデッサンである。③の歌、結句に後年読み慣れた先生の息遣いが感じられる。④の歌、この「をさなご」には、現発行人の富美子さんの幼き日の面影が浮かぶ。

⑤の歌、端正な上句がどんな世界を引き連れてくるかと読み進めば、下句で肩透かしを食らうという悪戯っぽい歌だ。若い時分から先生にはこんな悪戯ごころがあったのだ。

⑥の歌、一連の作品の締めくくりの歌とも読めるが、あるいは一連とは無関係のモノローグとも読める。壮年の先生には忙中閑、こんな余裕もあったのだ。この折々の「遊び」が、一方で先生の活力を支えたのだろう。

今月は村野先生が「歌壇雑感」を書かれている。見開き二頁ほどのスペースに、短歌に関する三つの挿話が収録されているが、その一つを引く。

北原白秋氏の藝術は短歌のみに限らず、詩、童謡、民謡、散文詩、其他有ゆるものに及んでゐるけれども短歌を作る場合には、矢張り其本源である萬葉集を元として居られるやうである。尚其上に近代人が所有して居る感情と單なる歌人が所有してゐる以外の廣い世界を開かれてゐる。其處を私等は深く味わつて見なければならない。其他斎藤茂吉氏が外国美術に感動し、釋迢空氏が歌舞伎に興味を持たれる場合に於ても之等が矢張り作歌上に好影響を持ち來して居るものと思ふ。斯く他の藝術より種々の滋養分を摂取して作歌上の便にすることは甚だ喜ぶべきである。然し其が爲に自己の作歌の主張に聊かの動揺を來しては居るものではない。物の本末を間違へてはならないのである。

歌を作るものが芭蕉を研究し、其藝術を尊ぶはよい。されど自らが歌人としての立場を危うくしてまで芭蕉に陶酔し、尚俳句に行かうとせず依然として中途半ぱな作歌を續けて行く人の矛盾を思はない譯にはいかない。

皆て白秋氏曰く「たゞ古來より一貫した藝術の眞精神の流れの上に立つた人々の中の一人として尊敬する」とある。まつたく芭蕉だからと云つて千古不滅の句ばかりある譯のものでもあるまい。尚氏は「芭蕉の三十九歳と自分の三十九歳の同年代を對比して、すこしは自分も望みがあるなと思つてゐる。對比されたについては謙譲の上から少年の如く一旦は頬を染めるが其上の卑屈心は起らない、私の望む空も同じく高く、わたくしはわたくしとして生かしきりたく思つて居るからだ。芭蕉の爲てゐなかつた爲事も少しは爲てゐるからだ。正直に云ふと、なんの芭蕉と云ふ氣持はある云々」以上は一代の詩人である同氏より見れば當然すぎる程當然のことであると思はれるのである。

このエッセイの前半にある「…然し其が爲めに自己の作歌の主張に聊かの動揺を來しては居るものではない」の個所については、苦い思い出がある。

わたしは作歌を始めて間なくして同時に現代詩を書き始め、二十代の後半に第一詩集『恋唄』を刊行した。その詩集を村野先生に送ると（当時わたしは福岡市に居住）はひどく不機嫌だった。先に引いた白秋の藝術論ではないが、わたしの詩は「他の藝術種々の栄養分」とは見做されなかったのだ。令弟四郎氏は詩人として一家を成されたが、次郎先生はわたしが誌を書くことを許されなかった。しかしわたしは先生に内緒で詩を書き続けた。

先生のご意志に反してわたしは第五詩集まで出してしまった。